

シャハイナ・グローリーの諸相 (3)

【聖書箇所】 マタイの福音書 17 章 1～9 節

ベレーシート

● 「シャハイナ・グローリーの諸相」としての第一は、神がホレブ山の麓で、「燃え尽きない柴」の中に現わされました。それは神がご自分の民をエジプトの地から救い出すためにモーセを召し出す場面です。第二は、神と神の民が共に住むための象徴としての「幕屋」が建造されたときに、神の栄光の雲がその幕屋をおおうという形で現わされました。その幕屋には昼は雲の柱、夜は火の柱として主の臨在が現わされていました。後のソロモン時代に移動式の幕屋から固定式の神殿へと変化しますが、その本質は同じです。目に見えない神と人との交わりが、目に見える幕屋、あるいは神殿を通して啓示されたのでした。やがてその幕屋(神殿)における主の臨在は、「人となったイエシュア」に現わされます。そのことをヨハネは次のように記しています。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 1 章 14 節

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

● 「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」の中にある「住まわれた」と訳された動詞は「幕屋を張った」という意味の「スケーノー(σκηνώ)」のアオリストです。つまり、神と人が共に住むために、神の御子の栄光がイエシュアという人の形を取って現わされたのです。「ことば」という表象で現わされた父のみもとから来られたひとり子の神としての栄光を、私たちは見たとヨハネは宣言していますが、特に「七つのしるし」の中にその栄光を垣間見たことをヨハネは証ししています。しかし共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)においては、いずれも「山上の変貌」の出来事において神の御子の本来の栄光の姿が現わされたことを書き記しています。今回は、イエシュアの「山上の変貌」におけるシャハイナ・グローリーとその意味することに目を留めたいと思います。この出来事が神のご計画において何を私たちに指し示しているのでしょうか。それは私たちにどんな希望を与えてくれるのでしょうか。



1. 「山上の変貌」の出来事に至るまでの文脈

● ガリラヤから始まった公生涯の期間は三年半ですが、「山上の変貌」の出来事はイエシュアの公生涯において、最後の一年の少し前頃に位置します。この頃、イエシュアは北の地方にあるツロやシドンの町にも(立ちのかれるかたちで)出かけています。この前後に、「五千人の給食」の奇蹟と「四千人の給食」の奇蹟がなされています。この二つの奇蹟は前者が「メシア王国における神との食卓」を啓示し、後者は「新しいエル

サレムにおける神との食卓」を啓示しています(詳しくは、牧師の書齋の『ヘブル・ミドゥラーシュ例会』の中にある「五千人の給食」と「四千人の給食」の奇跡に見る「御国の福音」のヴィジョンを参照のこと)。

●イエシュアがなさったこと、語ったことのすべては、神の永遠のご計画に基づいた御国についてであり、御国における福音です。そしてイエシュアは、ご自分が王としてこの地を治める(支配する)王国に、共に住む者たちを神の食卓に招こうとしておられるのです。

(1) ピリポ・カイザリヤにおけるペテロの信仰告白

●その後、イエシュアは弟子たちを連れて「ピリポ・カイザリヤ」という町に出かけます。そこでの伝道の記録はありませんが、この地に弟子たちを連れて行き、そこで重要な質問をしたことに意味があるのです。その問いは御子イエシュアの生涯を二分するほど重要な問いなのです。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書16章13～16節

- 13 さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」
- 14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」
- 15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」
- 16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」

●第一の問いはイエシュアの生涯のこれまでを要約する問いです。それは「イエシュアとはだれか」という問いです。後半は「イエシュアはなぜ来られたのか」という問いが隠されています。第一の問いに対しては、弟子の筆頭であるペテロが「**あなたは、生ける神の御子キリストです**」と答えます。

この答えが、「ピリポ・カイザリヤ」の地(右地図の緑枠)でなされた事が重要です。というのは、この町の名前の由来が当時の世界を支配していたローマ皇帝と深く結びついているからです。紀元前20年に、ヘロデ大王が皇帝アウグストゥスからこの地を拝領したことで、この地に皇帝の像を安置した大理石の神殿を建立して、敬意を表すためにこの町の名前を「カイザリヤ」(=カエザルの町という意味)と改めました。後に、ヘロデ大王の息子ピリポが(緑枠の地)父の建立した「カイザリヤ」(黒枠の地)と区別するために、自分の名前をつけて「ピリポ・カイザリヤ」としたのです。ここで、重要なことは、皇帝の政治力が神のように礼拝を受けている町において、「あなたは、生ける神の御子キリストです」という信仰告白が導き出された事です。実は、このキリスト告白は、ある意味で、殉教を意味する告白でもあるのです。なぜなら、当時は、ローマの皇帝こそ世界の「救い主」であり、「神」としても仰がれていたからです。ペテロの告白はそれに対抗することを意味していたのです。



(2) メシアの秘密

●ペテロの告白に対して、イエシュアは「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です」と釘を刺しました。そして、御父の示しに続いて御子イエシュアもペテロに対して言います。「あなたはペテロ(岩)です。わたしはこの岩(ペテロの告白)の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれに打ち勝てません。わたしはあなたに天の御国のかぎを上げます。・・・」(マタイ16:18~19)。と同時に、弟子たちに自分がキリストであることをだれにも言ってはならないと戒めます。つまり「**メシアの秘密**」です。福音書にはこうした「メシアの秘密」がしばしば登場します。なぜ秘密にする必要があったのでしょうか。それは信仰告白が意味する重大さ(つまり神の永遠のご計画、神のみこころ、神の御旨と目的)が、人々に正しく理解されないからです。イエシュアが神の御子キリストであることを正しく理解するためには、人々(弟子たちも同じく)の「理解の型紙」が打ち破られる必要があります。人々が求め期待していたメシアは人々の考えている「栄光のメシア」です。しかしイエシュアが「栄光のメシア」として現わされるためには、その前に「苦難のメシア」として現わされなければならないというのが神のご計画でした。このことはすでに旧約の預言者たちが預言していたことなのです。真のメシアは苦難を受けた後に栄光に入るとというのが神のご計画であり、神のみこころでした。ところがイエシュアの弟子たちはそのことを理解することができなかったのです。イエシュアが「**生ける神の御子キリスト**」であることが人々に正しく理解されるためには、苦難を受けることがどうしても必要だったのです。そこでイエシュアはそのことを初めて弟子たちに語り始めるのです。その部分を見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書16章21~23節

- 21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。
- 22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」
- 23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

●イエシュアの口から語られる初めての受難と復活の最初の予告でした。最初の予告というからにはその後もあるということです。実際、この予告は3回繰り返されています。最初の予告の時に、弟子たちの中で最初に反応したのはペテロでした。すばらしい信仰告白をしたペテロでしたが、彼が受難と死と復活の予告を聞いて、彼の口から出たことばは、「**主よ。とんでもないことです。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。**」ということでした。ところが、それに対するイエシュアの反応はなんと厳しい叱責でした。「**下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。**」と。このイエシュアのペテロに対する叱責は、「お前の方こそ、とんでもないことだ」という意味です。父である神に導かれて信仰の告白をした同じ人物の口から、今度はサタンに導かれた発言がなされたのです。それに対してイエシュアは厳しい叱責を彼にしました。おそらく、他の弟子たちもこのイエシュアの叱責を聞いて引いてしまった感があることは否めません。彼らは旧約聖書の預言者たちが語っていた「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、栄光に

入る」という預言を知らなかったのですから。ですから復活後に、メシアが栄光に入る前に、受難と死を受けるということを改めてイエシュアから聖書全体からそのことを説明されるまで全く理解することができなかったのです。イエシュアの弟子であったとしても、神が預言者たちを通して啓示された聖書を自ら読もうとしない限り、だれでも神の事柄を自分の理解の枠でしか理解できないということです。

(3) 御国に生きる神の民

●このイエシュアの叱責の後に、イエシュアは「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」とされました。ここで語られている「わたし」とは神の王国の王となられる方のことばであることを念頭に置かなければなりません。なぜ、「自分を捨て、日々自分の十字架を負って」について行かなければならないのか。その理由が次に語られます。「**自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです。**」というのがその理由です(24節)。イエシュアの弟子となることがどういうことかを教えられたのです。

●ルカの福音書では、9章57節以降にイエシュアについて行きたいと申し出た人たち、イエシュアから「ついて来なさい」と呼びかけられた人が登場します。そのうちでイエシュアに呼びかけられた人が「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」と申し出ます。するとイエシュアは「いいですよ」と言われませんでした。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい」と言われたのです。このイエシュアのことばが意味することはなんでしょう。神の国(御国の福音)を言い広める、あかしするという重要な働きを何よりも優先するようという意味で語られ、招かれています。親族におけるかかわりよりも優先されるべきことに従事することが、御国に生きる者のなすべき事柄だからです。自分にとって大切にしている事柄を「自分のいのち」と言い換えるならば、それを優先しようとするればそれを失い、それを王であるイエシュアのために放棄するならば、それを救う(得る)のだと言われました。イエシュアは「御国」という神の支配の現実—それが近くに来ていること—を、この世にあかしすることの優先性、重大性を確認するようにと弟子たちに迫まっておられたのではないのでしょうか。

2. 山上での変貌におけるシャハイナ・グローリー

●ペテロの信仰告白から六日たってから、イエシュアとその弟子たちの中から三人の者(ペテロ、ヨハネ、ヤコブ)だけを連れて、ピリポ・カイザリヤからさらに北にある高い山に向かいます。その「高い山」とは、「ヘルモン山」(2,774m)だと言われています(右図)。約一週間の弟子たちの心中を察するならば、次のようなことが言えます(甲斐慎一郎著「キリストの生涯の学び」より)。



- ①弟子たちはイエシュアにつまずいた。おそらくイエシュアの厳しい叱責に腹を立て、憤慨したはず。
- ②弟子たちはイエシュアがわからなくなった。理解できなくなった。
- ③弟子たちはイエシュアが本当に神なのかどうか、メシアなのかどうか疑い始めた。

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

●そうした状況からイエシュアは三人の者だけをひそかに(内密に)連れて、彼らをヘルモン山へと導かれました。だれのためでしょうか。それはイエシュア自身のためではありません。そこへ連れて行った弟子たちのためです。そのことを念頭において下さい。

●「山上の変貌」の記事は共観福音書がそろって扱っていますので、それらを見比べて読むのが重要です。三者の視点から見るので、細部は多少異なるのは当然ですが、より全体像が明確になってきます。ここではマタイの福音書だけを掲載しますが、マルコ(9:2~9)とルカ(9:28~36)は別紙をご覧ください。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書17章1~9節

1 それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。

2 そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。

3 しかも、モーセとエリヤが現れてイエスと話し合っているではないか。

4 すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」

5 彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい」という声がした。

6 弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。

7 すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない」と言われた。

8 それで、彼らが目を上げて見ると、だれもいなくて、ただイエスおひとりだけであった。

9 彼らが山を降りるとき、イエスは彼らに、「人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見た幻をだれにも話してはならない」と命じられた。



(1) なぜ、高い山なのか

●高い山でのイエシュアの変貌は、イエシュアが「神の御子であること」、「栄光のメシアであること」を弟子たちに正しく理解させ、これから起こる「受難と死とよみがえり」を正しく受け止めさせるためでした。そのために三人の弟子(ペテロ、ヨハネ、ヤコブ)が選ばれました。ちなみに、この「山上の変貌」の記事の前にイエシュアが弟子たちに語った不思議なことばがあります。それは「神の国を見るまでは、決して死を味わわない者たちがいます。」(マタイ16:28)です。マルコは「まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまでは決して死を味わわない者たちがいます」(マルコ9:1)と述べています。この者とはだれのことを言っているのでしょうか。それは、これからイエシュアと共にひそかに高い山に登る弟子たちです。つまり、その人物の名は「ペテロ、ヨハネ、ヤコブ」の三人です。

●ところで、なぜ「高い山」なのでしょう。これまで神がご自身の重要な啓示を現わされるときには、聖

書では山が多いのです。しかも高い山です。モーセはホレブの山の麓で「燃え尽きない火で燃えた柴」を見、そしてイスラエルの民をホレブの山のところに連れて来て、その山で神から律法を受け取りました。預言者エリヤも主の働きに疲れて、ホレブの山に導かれ、彼の後継者エリシャに油を注ぐように語られました。それゆえ、異邦人たちはイスラエルの神のことを「山の神」と呼んでいたほどです。天からの光を受けたサウロ(使徒パウロ)も、神の光を求めてアラビヤに出かけたとあります。おそらくそれは「ホレブの山」と思われます。まさに、聖書において「高い山」は啓示の場なのです。

(2) 変貌した姿こそ、御子の本当の姿

●本来イエシュアは神の御子でしたが、この世に来られるに当たって神の側面を捨てて来られたのです(ピリピ 2:6~8)。しかし、「御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった」のは、御子の本来の神の本性的な輝きが、肉体を突き抜けて、ありのままに啓示されたからです。といってもほとんどその姿は見えなかったと思われる。これが受肉以前の御子イエシュアの本当の姿なのです。マルコは「その御衣は、非常に白く光り、世のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった。」(9:3)と記しています。面白い表現をしていますが、その輝きの白さはこの世のものではないということを言おうとしたのだと思います。おそらく再臨のイエシュアもそのような姿で来られると考えられます。

(3) なぜ、モーセとエリヤが現われたのか

●不思議なのは、なぜ弟子たちは変貌したイエシュアと共にいるのがモーセとエリヤだと分かったのか。彼らは、実際に見たこともないのにどうして彼らがモーセとエリヤだと分かったのでしょうか。三人の弟子たちはおそらくここで頭を働かせたのかもしれませんが。というのは、山の上で神と話し合った人物といえば、モーセとエリヤしかいないからです。他にそのような人物がいるのでしょうか。モーセとエリヤは主の山であるホレブ(これまで聞かされてきたホレブの山ではない、アラビヤ(=ミディヤン)にあるホレブの山)で神と語り合っています。そのことが出エジプト記に、そして列王記にも記されています。エリヤの場合は1回限りですが、モーセの場合はなんと8回もシナイ山を上り下りしています(出エジプト記)。そのように考えれば、顔を知らずとも、山で栄光のイエシュアと語っている二人の人物は、モーセとエリヤ以外にいないと、これまで聞かされてきた知識で、直感的に分かったのかも知れません。

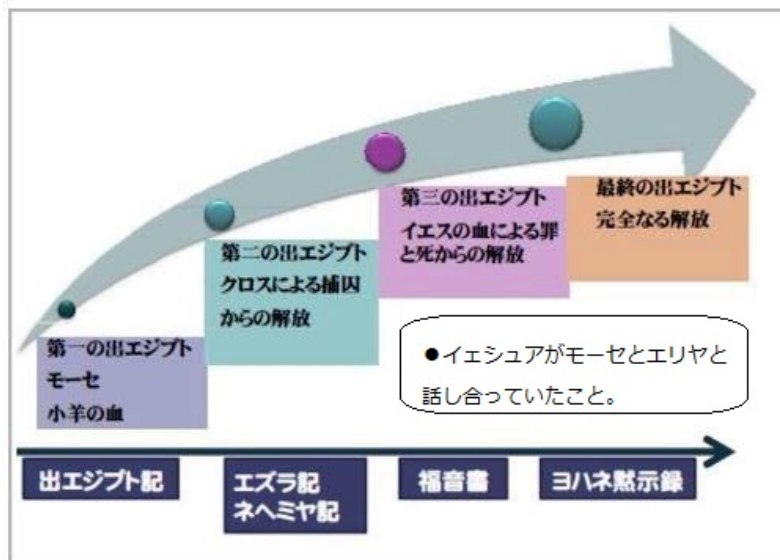
●三人が話し合っているのを見たペテロがした行為、つまり、ペテロが口出しして、イエシュアに「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」と言ったことは不可解です。ちなみに、ここでの「幕屋」は「仮小屋」のことで、ヘブル語だと「スッコート」(סֻכּוֹת)となっています。少しでも彼らがここにとどまってくれることをペテロはとっさに思いついたのででしょうか。いずれにしても、ペテロは何を言うべきかわからなかったようですが、「すばらしいこと」だと感じたことは事実です。むしろ深いなぞは、なにゆえにモーセとエリヤがここで登場しているのかということです。このなぞについて考えてみたいと思います。一般的には、モーセは律法を代表する者、エリヤは預言者を代表する者と言われま

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

す。そのような分類で考えるならば、イエシュアは諸書(聖文書)における「知恵」を代表する者と考えられ、三者のすべてが旧約の全体を啓示していることとなります。しかも、モーセとエリヤが現われてなにやらイエシュアと話し合っている(「語り合っている」)と記されています。どんな話し合いがなされていたのでしょうか。それについては、ルカが次のように記しています。「**イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していた。**」(ルカ9:31)。

●イエシュアが「**エルサレムで遂げようとしておられるご最期**」といえ、すぐに頭に思い浮かべるのは「受難と十字架の死と復活」のことです。果たしてそうでしょうか。ここに使われている「最期」と訳された言葉は、出エジプトを意味する「エクソダス」(ἔξοδος)です。さらに「遂げようとしておられる」という言葉は「プレーロー」(πληρώω)の未完形です。この「プレーロー」の本来の意味は「満たす」ということで、神があらかじめ定めておられたご計画を満たしていくという意味です。この神のご計画が満たされることについて彼らが話し合っていたと考えられますが、その内容については一切記されていません。

●イエシュアがやがてエルサレムで遂げようとしておられる最期(出エジプト)とは、受難と十字架の死と復活(十字架の恵みの福音)のみならず、**キリストの再臨における出来事**、すなわち「御国の福音」が含まれていると考えられます。このことは旧約の預言者たちが「二重預言」として、メシアの初臨と再臨を同時に見て語っていたことと符合します。つまり、以下の図における**第三と第四の「エクソダス」**について語り合っていたと言えます。



●特に、モーセとエリヤは、「栄光のうちに現われて」とあるように、**第四の出エジプト**である御国の完成(千年王国)のことが話し合われていたと解釈できるのです。とするならば、**モーセは「死んだ者」の代表であり、エリヤは「死なずに生きた者」の代表**と言えないでしょうか。しかも彼ら二人が「**栄光のうちに現われて**」とあるのはそのことを裏付けています。三人の弟子たちが見たモーセとエリヤの姿はやがてキリストの再臨時における栄光の姿なので。「やがて、こうなる」ということを見せることが「山上での変貌」が教えている事柄なのです。イエシュアが三人の弟子たちを連れて行ったのは、最期に実現する幻を見ることで、

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

彼らがたいなる希望を持つことを主が願っておられたからではないかと思われます。イエシュアが教え、そしてなさってきたすべての奇蹟は、まさに神の歴史の最期にエルサレムで実現されることだからです。しかしこの出来事も「メシアの秘密」の中に据え置かれます。少なくとも、イエシュアが死から復活するまでは、この出来事も正しく理解されることがないため、不用意に語る事を禁じられたのです。

●「御国の福音」は主の復活の出来事を信じている者であっても、なかなかありのままに信じられないのが、今日のキリスト教会の現実です。特に、置換神学で育てられた方にとっては、その枠を越えて理解するのはかなりの勇気が要ることかもしれません。しかしそれを越えるのに必要なのは、神学ではなく、**生きた主のみことば**です。そこで最後に、光り輝く雲の中から(シャハイナ・グローリーの中で)語られた声に注意を向けたいと思います。

●マタイの福音書17章5節の天の父の声がそうです。『**これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい**』。まさに、「わたしの愛する子」であるイエシュアの語られることばのみが、真理なのです。そして、真理はあなたを自由にするのです。新しい年が、イエシュアの語られたことばをより注意深く聞くことに徹していく年でありたいと思います。

2016. 1.1 元旦礼拝